

はじめてのアクション・リサーチ ——英語の授業を改善するために

佐野正之 編著

山岡俊比古

(兵庫教育大学教授)



アクション・リサーチ (以下、AR と略す) とは、授業において見いだされた問題点について、その実態の把握と原因の究明に努め、それに対する対策を考案してこれを実施し、その結果を検証してさらなる改善をめざす活動である。

理論からではなく、現場の問題意識から出発するこの研究法は、授業改善を常に心掛け、何とかよりよい授業を展開したいと思っているが、多事多端に迫われ、改まって理論を勉強する暇がなく、悶々としている教師にとって1つの突破口となるものである。

本書と同じ著者による『アクション・リサーチのすすめ』(大修館書店)は、この意味における授業改善の突破口を教師に提供する貴重な提言となった。多忙ではあるが意欲ある教師のいかに多くが、AR に目覚め、それに着手したかを想像するに難くない。

『アクション・リサーチのすすめ』がこの研究法の歴史や定義、他の研究法との比較、研究手法の概説を行い、読者をこの研究法へといざなう目的で書かれたのに対し、本書はさらに踏み込み、AR の実践を実現するための要点を具体的に説明する意図をもって書かれている。

本書のその意図は、「まえがき」に述べられている以下の課題に答えることにある。

「忙しい先生方のために、実践に必要な情報に焦点化できないか。一番苦勞する『仮説の設定』に役立つ英語教育の知識を組み込めないか。研修で実際に書かれたレポートを示せないか。さらに、先進的な研修プログラムを紹介できないか。」

この意図を受け、本書は以下の3部構成となっている。第1部：授業改善のためのAR、第2部：テーマ

別ARの進め方、第3部：教員研修とAR。

第1部は、ARの基本と研究の進め方のQ&Aを扱い、第2部は研究テーマとして、基礎的な英語力、4技能、学習意欲、少人数指導、小学校英語活動を挙げて研究の具体例を示し、第3部は高知県、神奈川県、広島県三次市、アクション・リサーチの会@近畿のそれぞれの教員研修での事例を紹介している。

本書は、授業改善を目指し、ARを「はじめて」行おうとする教師が確実にそれに着手できるように手だてを講じたものであり、可能性としての授業改善の突破口を、まさに本当の突破口とするためのものである。この意味において本書はきわめて貴重であり、意欲ある教師にとっての必読書となる。

文法項目別 英語のタスク活動とタスク ——34の実践と評価

高島英幸 編著

吉田健三

(兵庫県立神戸高等学校教諭)



教室内的英語教育を通して「実践的コミュニケーション能力」をどのように育成することができるのか。現場の教師が常日頃直面している課題に対し、本書は、具体的な実践例を提示した意欲作である。

そのモデルの根底には、Larsen-Freeman(2003)が提唱するように、文法を知識ではなくスキルとしてとらえ、「form(言語形式)、meaning(意味)、use(言語使用)」という3つの側面を相互に関連させ、同時に指導する必要がある」(p.14)という考え方がある。

現実の教室では多くの場合、言語形式とその意味を教える宣言的知識(declarative knowledge)の指導段階で留まっているのではないだろうか。具体的な場面に応じた言語形式を即座に選択するには、宣言的知識を手続き的知識(procedural knowledge)に発達させることが必要だといわれている。

本書は、そのような第二言語習得理論研究の成果を踏まえ、focus on forms(伝統的文法指導)の問題

点を解決するため、focus on form（言語形式にも焦点をあてた言語指導）の重要性を唱え、構造シラバスに基づいた検定教科書の使用を前提としている。

その言語活動の種類については、ESL と EFL の言語環境を区別した上で、Task-Based Language Teaching (TBLT) よりも Task-Supported Language Teaching (TSLT) の方が日本の教室での英語教育にはより現実的であるという考えに基づき、TSLT における「コミュニケーション活動」を次のように分類している。(1)タスク(Task), (2)タスク活動 (Task Activity: TA), (3)タスクを志向した活動 (Task-Oriented Activity: TOA)。これは、主に中学生対象の TA が取り上げられていた前著『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』（高島：2000）からの発展的な内容である。小学校での TOA, 高等学校での Task（特に Focused Task）を TA に加え、「小学校から高等学校へと一貫性を有する英語教育の『縦』の連携を構想する視点」（p. 215）が盛り込まれているのも本書の大きな特徴である。

高等学校では、英語 I や II の授業で explicit な文法説明を行ったのち、OC の授業で、TA や Task といった implicit なコミュニケーション活動を通して言語運用能力の育成を図ることが考えられる。本書の実践例を教室で試み、そこでぶち当たった問題点を分析し、個々の教室に適した言語活動を創造すれば、それぞれの教育現場の大きな財産となるに違いない。

パンクなパンダの パンクチュエーション ——無敵の英語句読法ガイド

リン・トラス 著 今井邦彦 訳

平井正朗

（京都文教中高等学校教諭）



今、イギリスやアメリカで愛読者が急増し、話題になっている本がある。題名は『パンクなパンダのパンクチュエーション——無敵の英語句読法ガイド』。著

者のリン・トラスは、『サンデー・タイムズ』の専任書評者であり、BBC ラジオ第 4 放送の常連出演者でもある。

同書は、2002年に放送され、好評を博した人気番組『カッコ付け』がベースになっている。句読法の重要性を浮き彫りにするために、タイトルは「ものを食べて、銃を撃って立ち去る」パンダのジョークを使っている。（カフェでサンドイッチを食べていたパンダがいきなり拳銃を取り出し、天井に向けて 2 発撃ち、そのまま出口へ向かう。それを見たウェイターが「どういことです」と訊くと、「俺はパンダだ」と言い、野生動物解説書を投げつけ、「読んでみな」と言う。ウェイターはそこに “Panda. Large black-and-white bear-like mammal, native to China. Eats, shoots and leaves.” と書かれているのを読んで納得するというプロットである。Eats の後のコンマの有無がコンテキストを変えるということを示唆したものである。[コンマあり→「食べ、撃ち、立ち去る」、コンマなし→「芽や葉っぱを食べる」の意]

内容は「序章—第七感」「アポストロフィは御しやすい」「それで十分だよ、コンマ君」「お上品ぶり」「格好を付けて」「ハイフン—あまり使われない句読記号」「ただの決まりきった印」という構成である。

女史の語り口は毒舌であるが、現在のイギリスの句読法の誤用を“クリティーク”するだけではなく、古代ギリシャで誕生した句読法の歴史的変遷についても言及している。同時に、Eメール、インターネット、ケイタイなどが現在の句読法の「乱れ」の要因であると指摘しながらも「書き手」の増加とそれに伴う文字文化の波及を温かく見守っている。

句読法は、ある程度英文が読めるようになった高校生でも、“軽視”する傾向がある。たとえば its と it's の区別など、頭で分かっている、誤文訂正や作文では見落としがちである。また、読解では、コロンのダッシュがあれば未知語を予測し、文脈を類推することができにもかかわらず、辞書に「頼りすぎて」いつまでもたっても「自立した読み」ができない生徒も多い。語学は「楽しく学ぶ」のが基本である。その意味でリフレッシュできる 1 冊であることに間違いない。一読をお奨めする。